寄稿

大学で学ぶということ

副学長 室井 義雄
むろい よしお

1980年東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学。東京大学博士（経済学）。専修大学経済学部講師・助教授を経て、1989年教授、94～95年ナイジェリア国立国際問題研究所客員研究員、2006～10年経済学部長・理事、10年副学長・理事、現在に至る。主な著書に『連合アフリカ会社の歴史』同文舘、『ビアフラ戦争』山川出版社、『南北・南南問題』同。趣味は原始貨幣・仮面・古布等の収集。60歳。

そもそも大学とは如何なる空間なのだろうか、大学では何を学ぶのだろうか―、新入生のご父母・保護者の中には期待と不安の入り交ざった想いを巡らしている方がおられるかも知れません。そこで、「大学で学ぶということ」について、私なりの考えを述べてみたいと思います。

大学の起源

何か物事を考察していく時には、その言葉や概念の起源・歴史を紐解いてみると、意外なことが分かってきます。そこでまず、大学の起源について考えてみましょう。アメリカの歴史学者である、チャールズ・ホーマー・ハスキンズの『大学の起源』(1957年)という書物によりますと、近代的な大学の起源は――厳密に言えば、非西欧世界を除きますが――、12世紀に発足したイタリアのボローニャ大学、あるいはフランスのパリ大学であると言われています。この初期の大学で特徴的なのは、大学は「教師と学生の組合」として成立した、という点です。いわば中世ヨーロッパの職人ギルドと似たような歴史を持つと言えますが、その名残は、例えば「マスター」という言葉として、現在でも残っています。大学院の修士課程をマスター・コースと言いますが、このマスターとは、もともとは職人ギルドの「親方」という意味です。

「universe」の多義性

ハスキンズは、「university」という用語もラテン語の「組合」に由来すると述べています。ただし、この点については、私には若干の異論があります。というよりもむしろ、「university」の語源である「universe」という言葉のもつ様々な意味合いを、より大切にしたいと考えています。つまり、この言葉は、「単体・統一」という意味の他に、「宇宙・森羅万象・全人類・普遍・博識・自由自在」などという、実に様々な意味合いを含んでいます。学生スポーツの世界大会のことを「universiade」、機械工学の世界では、自在継ぎ手のことを「universal joint」と言います。

こうして大学では、宇宙的なるもの、全人類に係る普遍的な事柄を自由かつ自在に学ぶことになります。当然にも、ここでは地球的・国際的な視野が必要になります。とりわけ第三世界・発展途上国における貧困問題にも敏感であるような、国際人として大きく成長されることを期待しています。かつて、131年前に専修大学を創設した4人の若者たち（相馬永胤・田尻稲次郎・目賀田種太郎・駒井重格）もまた、権威と強制に批判的で、平和と人権を愛する、字義通りの国際人でした。元ビートルズのジョン・レノン流に言えば、「Imagine, there's no country」（国境なき世界を想像してみよう）ということになります。

そして、大学が「学問の組合」である以上、教師が一方的に講義し、学生がただ漫然とそれを聞いているというのではなくて、教師と学生の両者が主体的に参加してこそ初めて成立する「知的な共同空間」である、ということになります。学生の皆さんは、自らの責任において様々な調査・研究活動を行なわねばなりません。教室の片隅にポツンと座っている「匿名主義」(名前を知られたくない)、あるいは、与えられた課題のみしか学習しない「定食主義」(自分で一品料理を選べない)の学生であっては、決してなりません。

自分探しの旅へ

ところで、上述の初期の大学で教えていたのは、多くの場合、神学・医学・法学、そして自由学芸(リベラル・アーツ)でした。リベラル・アーツの中には、文法・修辞学・論理学・算術・音楽・幾何学・天文学の7科目が含まれています。つまり、読み書き算盤、論理的思考方法、音楽という芸術、そして神秘的な宇宙に対する知的欲求の充足など、ということでしょうか。いずれにせよ、大学では各々の専門分野のみならず、社会人として必要な豊かな教養をも学ぶことになります。

ここから転じて、もう一つ学生生活で大切なことは、そもそも自分は何者なのだろうか、何処に歩もうしているのかという哲学、いわば「自分探し」の旅に出て欲しい、ということです。これから生きて行く長い人生に向けて、自分を見失うことなく、自分自身の確固たる価値観・思想を身に付けていただきたい。やや斜に構えて言えば、本学の全ての学生は――哲学科のみならず――、いわば副専攻として「哲学」を学んで欲しいということです。

この自分探しの旅においては、学友・友人の存在もまた必要です。学生の多くは、この友人を求めて、ゼミナール以外にも様々な団体・サークルに所属しています。ただし、何らかのサークルに所属していないと不安で仕方がない、飲食代を稼ぐためにアルバイトをしすぎて学業が疎かになる、あるいはサークル内の男女関係に翻弄される、などという情況も時折見かけます。私は、これを「サークル・シンドローム」と呼んでいますが、学生の皆さんは、自己の責任において、そうした症候群に罹患しないよう十分に留意せねばなりません。

社会知性の開発

さて、ご承知かと思いますが、専修大学は「社会知性の開発」という21世紀ビジョンを掲げています。英語では「Development of Socio Intelligence」と言いますが、「development」は「envelope 封筒」の否定形です。「de」という接頭辞には「〜から脱却する」という意味があります。つまり、「development」について言えば、開発というよりも、むしろ「封印を解く」という意味合いの方を大切にしたいと思います。「学生の無限の可能性を解き放つ」という意味です。そして、「socio intelligence」という言葉には、卒業した後においても、社会的な諸問題を自らの力で解決しうる能力を育てること、つまり、理性ある市民として、本学の学生が育って欲しいという願いが込められています。

この「市民・市民性 civility」という概念は、封建制が崩壊した後の18世紀の西欧世界で成立したものですが、当時のイギリスの国語辞典『Dictionary of English Language』(1772年)は、「野蛮barbarity」の反対語として載っています。また、イギリスの著名な経済学者のアダム・スミスは、『諸国民の富』(1776年)という書物の中で、「秩序と善政が支配し、個人の自由と安全が保証されるような社会」という意味で、「市民社会 civil society」という言葉を使っています。現代では、「civilian control」と言うように、「militarism 軍国主義」の反対語としても使われています。

ただし、私たちの近代市民社会は、個人的自由を獲得したいわば引き換えとして、「孤独・孤立」という社会的情況を生み出したことも事実かと思います。それゆえ私たちは、バラバラに孤立した個人の集団ではなく、「自律した理性的個人の連合体」という意味での市民社会を、これまで以上に構築していかねばなりません。

大学の4年間、時間は充分にあります。市民社会そして学問共同体の一員として、学生の皆さんの大いなる勉学意欲とその実践に期待しています。ご父母・保護者の皆さんのご協力も心よりお願い致します。